またぶり返したカゼ

ウガイが最良の予防方法

今年は流感（流行性感冒）の当り年らしい。この冬おそつて各地に休校続出という大流行を出して人人に恐怖をあたえたと思つたら、またもやこのときならぬ初夏の候に流感がぶり返し、全国的に満延している。九州でも若松市をはじめ休校する小学校があいつぎ、まつたく冬に逆もどりした感じである「かぜぐらい……」とか「ことしの流感は軽いから……」とナメてかかるのは禁物だ。まず、インフルエンザ（流感）とはどういうものかを知ることがもつとも大切である。

一万分の一ミリ

普通の〃カゼ〃には二通りある。一つはいわゆる〃カゼ〃で、病原体はコモン・コールド・ビールスだといわれるだけで、まだハツキリとわからないナゾ。もう一つがインフルエンザで、病原体はインフエルエンザ・ビールス。これは素焼のカベを通るほどの微生物で大きさは一万分の一ミリメートルという想像もつかない小さなものである。

一般は三種類があるといわれているが、つねにこの三つのうちの一つとは限らない。時と場合で新しい変型が出る。こんどのインフエルエンザーはA変異型と厚生省では認定しているが、これは新しい型であるという。

カゼは子供を狙つている

かかり易い子供

このインフルエンザ・ビールスは人間のツバ、ふん霧にまじつて人間の口、鼻から入る。そして鼻、ノドを浸して血液に入つて増殖する。潜伏時間は十五時間ないし二十時間といわれ、感染と発発はもちろん別で、感染しただけで三、四カ月間の免疫ができる。しかしこの免疫でも同種のビールスだけで新しいビールスには免疫はないまた年令によつても免疫の程度が非常に違がつてくるというのも大事なことである。生後一年から十二才までぐらいがもつとも免疫が弱い。小学生が一番かかりやすいのはこのためである。

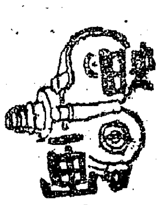
寝ビエ、ゲリが因

こんどのは発病しても軽症であるが、しかし油断は禁物である。肺炎などの余病を併発しやすい。しかも余病は発熱、食欲不振で体力が弱つたあとにくるのだから、条件はもつとも悪いということを知らねばならない。まず、何よりも寝冷え、下痢などで体を弱らせぬことが一番大切である。暑くなつて子供たちは夜よく寝冷えするからお母さんたちはよく注意することが大切である。

ウガイで洗い落せ

積極的な予防法としては外出から帰つたらまず何よりもさきに〃ウガイ〃をすること。食塩水、お茶三％ていどのほう酸水などなんでもよい。これは鼻、口から入つたビールスがノドについているうちに洗い流し、奥に侵入させないことになるのだから効果ははつきりしている。

なお、人間にたいする病源性をもつものは天然痘、ハシカ、流行性脳炎、デング熱、腺熱、泉熱などのビールスで、インフルエンザ・ビールスもこの一つである。増殖能力をもつており、この増殖のために生物の組織を侵すのである。ビールスが寄生する生物はそのために病的な状態になるわけ。ビールスの性状はまだ完全に知られていない。だいたい人間の疾患にビールスが原因しているとわかつたのは十九世紀末の一八九二年だから研究はわりに新しい。



あらくれ

女のたくましさが見せ物

明治から大正にかけて日本の文学は自然主義文学の極盛期であつた。そして徳田秋声の「あらくれ」はその代表作としていまもなお女主人公お島の野性的な性格は現代にもいきずいている。

……小さい時農家へ養女にやられ、十九の年まで育てられたお島（高峰秀子）はいやな結婚話から養家を飛び出し神田の罐詰屋の鶴さん（上原謙）の後妻になる。お島は勝気で向う意気が強く田舎育ちだけに働き者だが、男前の鶴さんは女出入りが激しく、そのことでつかみ合いの夫婦げんかを行い流産の末離縁させられる。だらしのない兄のため農村の旅館浜屋に借金の入質として取残される。お島はここで懸命に働いているうちに若主人（森雅之）と馴染んだ。気の弱い浜屋にお島は女らしい愛情を感じたが、世間体を気にする相手に別れようといわれ泣いて別れた。東京へ帰つた彼女は伯母のうちにいるうち、男つぷりは悪いが洋服の仕立職人小野田（加東大介）と知り合い結婚して小さな店を出すところが小野田は大の怠けものでいさかいが絶えなかつた。

そのころ山から浜屋が上京してきた。彼は肺病の治療かたがた見物に上京してきた。お島はこれを機会に彼から金を借り店を大きくしていくが、これが当つて店は繁昌する。

怠けものの小野田は金まわりがよくなるとおゆう（三浦光子）をかこい者にするしまつ。浜屋がキトクと聞いたお島は山へかけつけたが、もうこの世の人ではなかつた暗い気持で東京へ帰ると店を出る小野田に気がつく。彼女がつけて行くと、小野田はおゆうの家え入つて行くのだつた。お島の声に飛び上つた小野田は雨の中を逃げていく、土砂降りの中を物干竿でおゆうをたたきのめしたのち、店に電話して気に入りの職人木村を呼び出し、これからの相談もあるからと温泉行きを誘うのだつた。

木村を待ちわ合せるために雨の中を立去つて行くお島の後姿には、ありし日の百姓女のたくましさとともに、一沫の寂しさがただよつていた。勝気で、向う気の強いヒロインお島を中心に、無知を本能的な生活力のあるたくましい女を描いている。（五日より太陽館で上映）

四山春季俳句大会

四山鉱春季俳句大会は去る五月十九日麦秋の雨煙る高瀬三井保養所で開催された。

主催　四山鉱俳句会
後援　四山鉱、労組支部、職組支部、熊本日々新聞社
代表者　鷲尾松祥、田中つねを
山崎南窓（イ、ロ、ハ順）
入選句左の通り

鷲尾松祥　選

特選
中学生四山　馬場　純一
水遁の一つ浮んで池まろく

佳作
四山　石橋三根志
木洩れ陽をうごかしてがま草に入る
玉名町　大西　啓恵
男性の如き歩調や青あらし
四山　蓮尾　蒼鳥
新緑や雲湧きあがる三の岳
四山　邦須　静峰
湯女たちの巻上髪や街溽暑

【田中津根を　選】

特選
三川　永野　鼎衣
飛ぶ風に火薬香せし胸冷やす

佳作
四山　田中　朱草
少女期の笑や新樹を眩しみて
四山　高田　幸月
麦穂ゆれ尻出し少年かくれけり
四山　鶴田　春湖
予後の身は昼の月見草見て渡る
三川　永野　鼎衣
青芝に日の富み傘を飽かず乾す

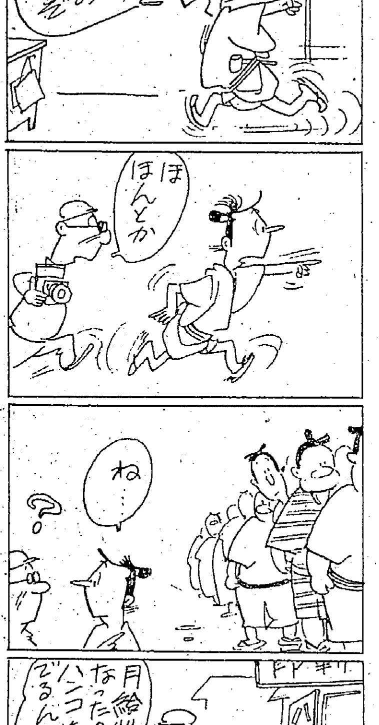
山崎南窓　選

特選
玉名　大西　啓恵
衣更く粧すれば人恋し

佳作
四山　馬場　春塔
茶碗もて金魚を買ふて来し子かな
四山　田中津根を
わたもつたんぽぽ鉄路の砂利錆色に
四山　高田　幸月
寝不足の湯女の洗面大ふぐり
四山　田代　典雅
眠つている浴槽や柿若葉

なお職鉱組支部長賞は右の二氏に贈呈
高点句賞　邦須静峰、最高点賞　林肯栗子。入賞者には賞品及び熊日メダルを贈呈された。参加者約三十名。

長屋太平記　中村かめお


た…た… たいへんだッ 関取家のデモらしいぞ
ほ ほんとか
ね…
?
月給制度になったので ハンコをたのんでるんじゃないか

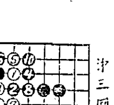
囲碁教室 (12)

「二目にして捨てよ」

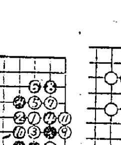
第一図と第二図を比較してみて下さい。第一図の黒7とあてる前に第二図では5の石を黒7とノバしました。その効果は白15までと外部の締付けに成功した点にあらわれており捨石戦法の代表的なものです。

第三図、この様な石の配置において、白が自己の形を整える時に白1とつけてゆく手がありますこの場合も白5とノバした手が「二目にして捨てよ」の応用で白は7と9の両方をきかす事が出来、白5と二目にして捨てた代償は得られたわけです

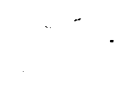
第四図、さて白が1とノゾいて来ました。どう受けるのが最善でしょうか？。結論を先にいうと、黒2と受けていいのです白3とキツた時に黒4とノバすのが「二目にして捨てよ」の筋で、黒13まで鮮かにサバキました、黒2を3にツギ白に2と出られては何れかの黒石が不安です。



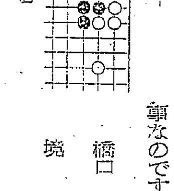
第一図



第二図



第三図



第四図

要するに「二目にして捨てよ」という事は辺における捨石の場合、一応考へてみるべき事なのです。

橋口　初義
境　敬一

＝季節のことば＝

カツパ祭

シーズンとあつて、派手な夏祭りのおこなわれる中で変つたのにカツパ祭りというのがあります。東京品川にあるえ原神社のは二百八十年もの歴史をもつ古いもので、そのほか鎌倉八幡宮、九州太宰府天満宮の末社などでも盛んにおこなわれます。この動物は仮空のものだけに、数多くの伝説を残していますが、カツパは水神（ひようへ）ともよばれ、カツパ祭りは水難を除き、魚獲の豊富ならんことを祈る風習をのこしたものといわれます。

カツパが歴史の上にのぼつたのはざつと三百三十年ほど前のことで当時の研究図録をみると甲があつて体に毛のないのと、甲がなく全身毛だらけのものとが写されています。伊達侯の下屋敷で捕えたのは犬ほどの大きさのものだつた、ともつともらしく書き残されているのも、涼みばなしにふさわしいものです。

〃地下足袋〃

地下足袋は朝寝の出来ぬ人が好き
地下足袋で石橋センター作り上げ
わらじから地下足袋までの坑内史

三川　山本　幸舟
（らくがきより）

＝今週の映画＝

○セントラル　五日より「明治天皇と日露大戦争」「ジャングルと文明」
○太陽館　五日より「あらくれ」「男なりやこそ」
○大天地　四日より「母と子の窓」「歴史は夜で作られる」

『短篇小説』

穴もぐり争議

関口　隆司

泉加代は、O町観光ホテルの女中を五年も勤めてきたが、その時ほど女中をしている自分を情けないと思つたことはなかつた。

その日朝早くから、入れ替り立ち替りに幾組もの団体の遊山客が押しかけていて、ホテルの中は雑踏のにぎわいにわいていた。加代たち八人の部屋女中は、目の廻る忙しさで、その客を手際よくさばいた。しかし、団体客のせわしなさは、正午を二時間過ぎても、昼食を摂る暇もないくらいのものでさすがに八人ともげんなりと疲れをみせていた。とくに加代は風邪気味のところえ、前日に始まつた生理がひどく病人のように喘いだ

「支配人にいつて休ましてもらいなさいよ、当然の権利なのだもの」

詩人の文ちやんと呼ばれる文江は、見かねて加代にささやいた。

女だけが知る生理の苦しみは、そのささやきをほかの女中たちにまで伝えて、加代に同情と知恵をよせあつた。

「私たちで、なんとでもするから―」

と女中頭のせつがいいかけたとき、折悪しく支配人が通りかかつて聞きとがめた。

「勝手なまねをさせませんよ、この忙しいときに」

といい放つた。りんとした響をもつた支配人の言葉には、すがるわずかの余地もないきびしいものがあつた。ホテルの従業員から「ヒス婆」と悪口をたたかれているこの女支配人は、五十を二つほど越していた。人使いの悪いことはこの世界ではあまりにも有名であつた。小切手で乾うどん一把の買物をさせ、しかもそれに領収書もらつてこらせることなど、町人たちの語りぐさにもなつているくらいだつた。女の腕一本で、ホテルをO町でも指折りのものにするには、そのくらいにしなければね、などとも語らせるが、その下で働く加代たちには耐えられないことだつた。

「私とて女です。加代さん、女の生理を病気だなどといつては罰があたりますよ」

支配人のいつた生理が大きくあたりにひびいた。その周りにいた若い団体客は、生理のことばに刺戟されて、好奇の目差しで三人、五人と集つて輪をつくつた。

加代は恥しさで顔を真赤にした。そして双の掌で顔を被つた。若い加代にとつては、大変な恥しめであつた。一刻も早くこの場を抜けだしたいと思いながら、足がすくんで動きだすこともできなかつた。若い客たちの、ささやきや含み笑いが、加代の全身にささりこむように思えた。加代は羞恥からしだいに悲しみの感情につつまれていつた。やがて顔を被つている掌の間を伝つて、熱い涙が落ち、よく磨かれたフローラーの上に幾つかの水玉をつくつた。その涙をみて支配人は再びはげしく詰問した

「泣くほどくやしかつたら、女の病くらいでズル休みなど考えないことですよ」

それだけいうと、支配人は急に声を和らげて囲りの若い客に世辞を並べて、去つていつた。

詩人の文ちやんは、その夜、おそい就寝に集つてきた女中たちに相談をもちかけた。

「もう、誰がなんといつても我慢がならない」そしてその日から三日後の五月一日から彼女たちは八畳二間をうち抜いた女中部屋にこもつて〃穴もぐりスト〃などとよばれる珍らしいストライキに入つたのだつた。